



Title	アラブ・イスラム文化における百科全書思想
Author(s)	岡崎, 桂二
Citation	アラブ・イスラム研究. 2011, 9, p. 57-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105934
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アラブ・イスラーム文化における百科全書思想⁽¹⁾

岡崎 桂二*

Encyclopaedia in Arab-Islamic Culture

Every age has its peculiar encyclopaedia, declares R. L. Fowler. Intellectual as well as social, religious, and political traits of an age are disclosed in encyclopaedic texts. When we scrutinize encyclopaedias in terms of their form, style and content, we can have a better understanding of the distinguishing features of an age and its culture. One of the tenth century *leishus* (類書), a blanket term for Chinese encyclopaedias, divides the collected articles into 55 sections, arranging them under 5, 426 rubrics, which reveals the Chinese preference for meticulous classification. Arab Islamic culture produced various types of encyclopaedic works, and Ibn Qutayba's '*Uyūn al-Akhbār*' is regarded as a first attempt at compiling an anthology of information needed by budding intellectuals (*adībs*) and aspiring secretaries (*kuttāb*). *Adab* anthologies imitating Ibn Qutayba's seminal encyclopaedia betray Arab Islamic concepts of knowledge in that they select exclusively those texts which are stylistically refined and ethically recommendatory.

This paper traces the trajectory of Arab encyclopaedias from the beginning in the ninth century to the fifteenth century which produces the *al-Mustaṭraf*, a massive encyclopaedia intended for a wider readership. It also aims to study the classification of knowledge in Arabic culture, prerequisite for composing encyclopaedias. Classification was attempted by philosophers, government officials, and *adībs*. al-Fārābī's *Enumeration of the Sciences* and al-Khwārizmī's *Keys of the Sciences* are interpreted in our study. We conclude that the collection of fifty-two *Rasā'il* (*Epistles*) of the Sincere Brethren, a unique combination of their tenets and the classification of knowledge for pedagogic purposes, fulfills the basic requirements for an encyclopaedia: arrangement, organization, and comprehensiveness.

* 四天王寺大学人文社会学部 教授

- (1) 周知のように、アッバース朝以降、イスラーム圏において文化の担い手はペルシア人を筆頭に多様な民族であったが、本稿におけるアラブとは民族ではなく、アラビア語という言語要素を指す。つまり、本稿はイスラーム圏でのアラビア語著作の分析を行おうとするものである。アラブ散文文学の黎明を告げるのがイブン・ムカッファ（756年？没）がパフラビー語から訳した『カリールとディムナ』であり、また、アラブ詩の革新（バディーウ）をもたらしたバッシャー（783年没）、アラビア語文法の大成者、シーバワイフ（786年没）、歴史学と法学の大家、タバリー（923年没）らがともにペルシア人であった事実が、アラビア語を紐帯として確立されたアラブ文化の本質を示唆している。Corbin（黒田・柏木訳）、Ⅶ～Ⅷ頁、169～170頁、参照。Cf. Pellat(1966), p. 633.

1. 初めに

『千夜一夜物語』第436夜から第462夜は女奴隷 (al-jāriya) のタワッドウド (Tawaddud) を主人公とする。⁽²⁾ 彼女は、豪商の息子で、莫大な遺産を相続しながらもことごとく蕩尽し、落魄した男に囲われていた。主従は終に日々の食にも事欠くに到り、ために、タワッドウドは自らをカリフ、ハールーン・アッラシードに1万ディーナールで身売りするようにと提案した。カリフの御前に伺候した女は、自身はその金額に相応しい人物であると宣言し、朗々と身に付けた学識の一旦を披露して証拠の一つとした。ここにおいてカリフは、彼女と配下の学者を討論させ、論争に打ち勝った時には、約束の額にさらに加増して下賜すると申し渡した。このようにして、才色兼備の女奴隷と、学識において当代並び者なき諸学者との論争 (munāzara) が始まった。タワッドウドは臆することなく、『コーラン』に関する知識に始まって、法学、文法学、神学、等々、次々と学者が繰り出す難問を撃破する。このようにして、彼女は「宗教と身体に関するあらゆる知識」 ('ilm al-adyān, 'ilm al-abdān) を有することを示す。⁽³⁾ そして、事前の取り決め通り、論戦に敗れた学者たちは、次々と栄誉と権威の象徴である外套 (taylasān) を脱いでその場から立ち去っていった。⁽⁴⁾

この『千夜一夜物語』中で異彩を放つタワッドウド物語は、学問論争という物語性に欠け、娯楽性に乏しいとして、ガランやレーンを筆頭に現行のヨーロッパ各国版においては削除されている場合が多いが、逆に、ミケルは敢えてこのような退屈極まりない物語が挿入されたことこそ、この物語と現実社会の密接な関係を示唆しており、決して架空のものではないと主張する。⁽⁵⁾

(2) Macnaghten, vol. II, pp. 491-537. 前嶋訳、234頁～353頁。

(3) Miquel(1981), p. 20.

(4) タイラサーンに関しては Grunebaum, p. 213, fn. 107; 岡崎 (2009) 、327頁、注75参照。通常、架空の人物、創作上の人物は取り上げない『イスラーム百科全書』 (Encyclopaedia of Islam) はタワッドウドを立項してその重要性を示している。EI, sv. Tawaddud(J.-P. Guillaume). 古代ギリシアに発し、中世スペインに到るこの「物語」の簡略な研究史は、前嶋の「あとがき」、355頁～370頁、参照。より詳しくは、Gelder, p. 241, fn. 1; Bremond and Darbord, pp. 260-272; Miquel(1981), pp. 13-15, 参照。論争における敗者の行動は、EI, sv. munāzara(E. Wagner), 参照。

(5) ヨーロッパ各国語版における省略は、前嶋、356頁、参照。この「物語」と現実社会との関連については、Gelder, p. 242; Miquel(1997), 参照。

本稿の目的からすれば、「タワッドゥド物語」は数々の興味深い題材を提供してくれる。まず、多岐に亘る論争のテーマは、その当時のイスラーム世界における学問分野を網羅しており、知の総括として小型の「百科全書」と見なしうる点である。⁽⁶⁾特に杵物語として、論争相手の諸学者は、当代きつての思想家でムッタズィラ派の巨匠、ナッザームの弟子達であるというモチーフは、論争の信憑性を担保し、迫真性を盛り上げる役割を果たしている。⁽⁷⁾さらに、奴隷が修得した学識により主人の窮状を救うとする、知識は力なりという、この「物語」の通奏低音が挙げられる。⁽⁸⁾アダブと称される学識が高く評価された社会像が浮き彫りにされ、博識と雄弁に基づいた即興能力が最も重視された文化環境を活写している。⁽⁹⁾そのアダブに基礎を置く文化においては「人は知識を求める限りにおいて (mā ṭalaba al-‘ilm) 学識者 (‘ālim) であるが、学ぶべきものは無しと考えた時には無知となる (jahila) 」の言に集約できるように、絶えざる知識修得が要求されるとともに、知 (‘ilm) と行 (‘amal) の一致が求められていた。⁽¹⁰⁾ジャーヒリーヤ期よりの伝統を持つ論戦 (ムナーザラ) の場において、アディーブたちの知識をめぐる才能と研鑽が最も華々しく発揮される。⁽¹¹⁾

本稿は、学識が重要視されたアラブ・イスラーム文化における百科全書の歴史とその意義を、アダブの一環として生成した9世紀から、百科全書の時代と称される14世紀

-
- (6) Gerreschはこの「物語」を対象に、「中世イスラームの小型百科全書」という副題を持つ論文を書き、論争内容を分析して、スンニー派とシャーフイー学派の影響を指摘している。Gerresch, pp. 64-77. さらに Guillaume はこの「物語」で交わされる議論、論争は、200もの多岐に亘る話題に及ぶと指摘する。EI, sv. Tawaddud (J. -P. Guillaume).
- (7) ムッタズィラ派の神学者で、勢威をふるい、多数の信奉者を得ていた。EI, sv. Al-Naẓẓām (J. van Ess); Ibn al-Nadīm, p. 205; Dodge (tr.), pp. 391-393, 参照。彼は配下の法学者、医学者、哲学者、幾何学者、占星術師、賢人 (鍊金術師等) を同道してタワッドゥドとの論戦に臨む。
- (8) Gelder, p. 246; Paret, p. 80; Grunebaum, pp. 234-238. 『千夜一夜物語』の構造分析を行った Gerhardt は、この「物語」を「女性が機智で窮地を脱する」サイクルに分類する。Gerhardt, pp. 342-344. イスラーム文化、社会における知識重視の姿勢は、ムハンマドの言として残されている「知識を求めてシナまで」が端的に示している。EI, sv. ‘ilm (Ed). イスラーム圏における学問観に関しては、事典、「学問 (イスラムの) 」 (佐藤次高)、参照。なお本稿では百科全書研究の核心をなす語である「ilm」を、その内包する意味、指示対象、使用環境 (コンテキスト) に応じて、適宜、知識、学問、~学、学知、知と訳し分けたが、その区別を一々注記することはない。なお、英文ではイルムには science, knowledge の訳語が充てられる場合が多いが、イルム研究の大著を著した Rosenthal は、‘ilm を knowledge と訳すと原語の多くの要素が抜け落ちると注意を促している。Rosenthal, pp. 1-2. 当該書は「ilm」に関する総合的研究であり、語源 (第1章) から始まって、神学・宗教諸学 (第5章)、スーフイズム (第6章)、哲学 (第7章)、社会・教育 (第8章) との関連を精査する。特に、第8章 (240頁~333頁) は ‘ilm と adab, hikma, ‘aql との関連を論じており、本稿を裨益する。
- (9) Natij はアダブを基とする社会では、会話 (muḥādatha) と社交 (ta’nīs) が核をなしていたと論じる。Natij, p. 227, p. 230, pp. 272-274. 即興 (irtijāl, badiha, iqtidāb) に関する簡潔な説明は、EAL, sv. improvisation (G. J. H. van Gelder), 参照。
- (10) Ibn Qutayba, ‘Uyūn, vol. 2, p. 134. Cf. Lecomte, p. 448. アラブ・イスラーム文化における知行合一の思想に関してはローゼンタールが詳述している。Rosenthal, pp. 240-252.
- (11) EI, sv. munāẓara (E. Wagner); *ibid.*, sv. muḥākharā (E. Wagner & Bichr Farès); EAL, sv. debate literature (G. J. H. van Gelder); Paret, p. 63, fn. 2. 岡崎 (2009) はアラブ文化における論争の歴史と意義を考察したものの。

を経て、al-Ibshīhī 著『典雅な事物に関する新奇な話題』という総合的な作品が著された15世紀までをたどり、叙述形式、内容、知識分類における変容の有りようを明らかにし、さらにその変化の背後にある思想を探ろうとするものである。

Gelder が述べるごとく、「自尊心に溢れた民族や国民は独自の百科全書を必要とする」であろう。⁽¹²⁾ 確かに、百科全書はそれを作り上げた民族、国民の威信の発露と見なせよう。しかし、より重要なのは、知の総体を結実させた百科全書は文化の到達点を示すのみならず、その編集姿勢や受容態度は当該文化の本質を如実に示す点である。⁽¹³⁾ これを裏付けるがごとく、同じイスラーム圏に属しながらも、アラブ百科全書は文化的で通読目的であるのに対し、イランの百科全書は科学的で参照されるのを目的とする、と Vesel は両者の相違を指摘する。⁽¹⁴⁾ また勝村は、中国文化において類書と名付けられる百科全書はその呼称が示すように、「ものの同質性を明らかにする目的をもって編纂された書物」であって、その「編纂態度は、中国人の認識の構造と密接にかかわる」と論じる。⁽¹⁵⁾

本稿はこのような問題意識に則ってなされるものである。

2. アダブ的百科全書

百科全書のヨーロッパ人研究者が異口同音に語るごとく、この分野の研究の第一歩は百科全書の定義である。しかし、ヨーロッパにおける *encyclopaedia*, *encyclopédie* という用語同様、アラブ・イスラーム文化においても、百科全書 (*mawsū'a*, *dā'irat al-ma'ārif*) という用語は古典アラビア語には存在せず、19世紀の造語である。⁽¹⁶⁾ それゆえ、これ

(12) Gelder, p. 259; Marzolph, p. 416.

(13) ファウラーは、「全ての時代は、その時期特有の百科全書を有す」と述べ、また、コリソンは、「書籍の焼却や百科全書の編集方針への介入は国家の病いの兆候である」と断じる。Fowler, p. 6; Collison, p. 14. 本稿においては百科全書の受容状況や読者層の分析は行っていないが、15世紀の著作である、イブシーヒーの『典雅な事物に関する新奇な話題』が現代に到るまで版を重ね、その縮約本、簡約本が作り続けられている状況は、知識の重視、知への偏愛、会話能力の評価、を基とするアラブ・イスラーム文化の本質を如実に示すものである。Cf. Marzolph, p. 415.

(14) Vesel, p. 6. イスラーム辞書・事典の概略は、事典、「事典/全書 (イスラムの世界)」(菊池忠純)、同、「辞書/事典 (イスラムの)」(三浦徹)、イランの百科全書に関する簡略な紹介は、守川、198頁～202頁、参照。Vesel は哲学、宗教、行政、自然学、の分野別にペルシア語百科全書を分類して、詳細に論じる。Cf. Vesel.

(15) 勝村、12頁～13頁。Cf. Fowler, p. 6. 中国の百科全書に関する概観は、事典、「事典/全書 (中国の)」(飯尾秀幸)、同「百科全書 (中国の)」(岸本美緒)、同、「辞書/事典 (中国の)」(尾形勇)、参照。

(16) Ribémont はその百科全書の歴史を扱う論文の冒頭で、アナール学派の大家、J. Le Goff の言を引用して、ヨーロッパ中世史における *encyclopédie* の語の不在を嘆いて、その研究の困難さを指摘する。Ribémont, p. 47. また、Fowler や Rubincam もこの語の初出をルネッサンス期 (15世紀) とし、Quintilian の翻訳書の書名に付されたとする。Fowler, pp. 27-29; Rubincam, p. 136. ファウラーはラブレが『パンタグリユエル物語』中でこの語を用いているが、著者はおそらくその後の「百科全書」の発達を夢想だにしていなかっただろうと論じる。Fowler, p. 26. アラブ・イスラーム文化においても事態は同様であり、*dā'irat al-ma'ārif* (知識の円環) は *encyclopedia* の語源に即した訳語であり19世紀に、また、*mawsū'a* (広大無辺の意) の語は20世紀における新造語である。Marzolph, p. 413; Gelder, p. 252, p. 259; *EL*, sv. *mawsū'a* (Ch. Pellat); *EAL*, sv. *encyclopedias, medieval* (H. Kilpatrick). わが国においては、西周が *encyclopedia* の原義を考慮して「百学連環」の語を作り出したが、その経緯は渡部論文参照。なお、「百科全書」の概観はコリソン著が定評があり、百科全書の長大な歴史を扱い、また、イスラーム圏、中国をも含む対象の網羅性により高く評価されている。Cf. Collison.

らのタイトルを付された書物は本稿の対象時期には存在せず、百科全書と冠された書籍の著述形式、内容、分類法、記述対象、等々から百科全書の定義を下そうとする接近法は閉ざされている。ゆえに、百科全書研究は様々な著作の内容を比較考量することにより、その定義を析出するところから始めなければならない。

ハールーン・アッラシードの治世時（786年～809年）、アッバース朝は隆盛を極め、諸学問の花が開いていた。さらにその後もアル・ムウタズ（869年没）、アル・ムウタミド（892年没）、等好学のカリフが続いた。⁽¹⁷⁾ そのカリフ宮廷を頂点とする宮廷社会では、博識と雄弁が評価され、即興能力が何より珍重された。また、行政制度の整備とともに必要とされた書記官僚（カーティブ）達にも、文書起草という職掌上、多様な知識が要請された。それゆえ、進取の気質に富み、栄達を目指す者たちは、等しく学識（アダブ）の修得に余念がなく、論戦に勝利して出世の糸口を見つけようとしていた。先述の「タワッドゥド物語」もこのような文化環境を背景にして生み出されたのであろう。

近代以前、アダブは文学や *literature* を意味する言葉ではない。アダブは倫理、礼節を基調とする生活様式を指すとともに、それらに関わる広範囲の知識をも意味し、一つの学問分野に関わる専門的知識（イルム）と相補関係をなしていた。さらに、アダブを修得した人士を意味するアディーブの語は、そのような広汎な知識を求める態度、接近方法を取る人を指して用いられた。⁽¹⁸⁾

このようなアダブ観に基づいて、文化の黄金時代と称される9世紀になると、「詩撰集」として『ハマーサ詩集』が編まれて人気を博し、他方、知識の要覧としての「抜粋集」「摘要」が編纂されていた。⁽¹⁹⁾ これらの書物は「全ての学問分野を少しずつ修得する」というアディーブやカーティブの要請に応じたものであり、⁽²⁰⁾ その典型例が Ibn Qutayba（889年没）の『情報の泉』や Ibn ‘Abd Rabbih の（940年没）の『比類なき首飾り』である。

(17) Holmberg, p. 195; Chapoutot-Remadi, pp. 37-38; *do.*, p. 38, fn. 3; Paret, p. 51, fn. 3; Heinrichs, p. 120; Callatay, p. xiv.

(18) アダブの定義に「知識に対する接近法 (approach)」を与えたのは、Holmberg, p. 201, である。アダブの時代別の語義変遷に関しては、岡崎（印刷中）、参照。Pellat に代表されるように、イルムを宗教関連の知識、アダブやマアリファ (ma'rifa) を世俗的知識とする説は、Gelder, Heinrichs, Rosenthal らにより否定されている。Pellat (1966), p. 634; *do.*, *El*, sv. mawsū'a; Rosenthal, p. 4. 確かに「ハディース集」に残されている「知識を求めてシナまで」の知識は宗教的知識、より具体的には預言者のハディース（言行）を指すが、アダブの基本姿勢である、「全ての知識を少しずつ修得する」や「最良の知識を選び取る」の場合には、あらゆる学問分野が対象となっている。それは、「学者（‘ālim）になりたければ一つの学問を、アディーブになりたければ全ての学問を」の言が示しているように、アダブは宗教的知識をも包含している。Gelder, p. 244; Heinrichs, pp. 120-121; Bosworth, p. 98; Rosenthal, pp. 252-277; *El*, sv. ‘ilm (Ed). ハインリークスはイスラーム暦の4世紀（西暦10世紀）には、アダブは概ね3つの意味を含み、それらが並存して用いられていたと論ずる。すなわち、①良き、洗練された礼儀・態度、②文体、倫理的内容において引用に値する逸話の集成（集）、③知識の総体、である。Heinrichs, pp. 119-120. 注（8）参照。

(19) Klein-Franke は大部な『ムファッダリヤート詩集』より Abū Tammām (846年没) の『ハマーサ詩集』(Dīwān al-Hamāsa) の方が人気が高かったのは、前者は一句の全文が収載されたのに対して、後者が引用に適した内容を精選し、さらに暗記に便利な抜粋集であったからだ、と論じる。Klein-Franke (1972), p. 155; *EAL*, sv. anthologies, medieval (H. Kilpatrick).

(20) Ibn Khaldūn, p. 587. (森本訳、第4巻、90頁)。Gelder, p. 244, fn. 8. 注（10）参照。

これらの書物は、その記述内容の網羅性、体系性、倫理性を特色とする。⁽²¹⁾『情報の泉』を嚆矢とする「知識の抜粋書」にもまたアダブの語が冠されたが、森羅万象を取り扱い、分類して知の体系化を計る、この総合性、体系性こそが百科全書の第一条件と見なせるであろう。⁽²²⁾

百科全書の定義をその網羅性、体系性に求めると、アダブ作品の嚆矢と見なされるジャーヒズの諸作品、特に大部な『動物誌』、は、Pellatの主張するようには百科全書の範疇には入らない。ジャーヒズ作品に通底する冗漫と気まぐれが『動物誌』に横溢しており、そこに一貫した体系はない。この点でイブン・クタイバ作品と好対照をなしている。同様に、各種情報を収載して地理書、歴史書の域を脱しているマスウディー著『黄金牧場』も、体系性の欠如により百科全書の資格を欠く。⁽²³⁾

イブン・クタイバは知識を総合的に纏め上げた撰集を複数書いているが、その中で『書記のアダブ』(Adab al-Kātib)は、相伴者(ナディーム)、法官(カーディー)、等の一部の専門家集団に向けて編まれた規定的アダブ作品の典型をなし、文法学、就中、語彙学を中心とする書記官僚に必須の知識を体系的にまとめたものである。⁽²⁴⁾他方、『知識の書』(Kitāb al-Ma'ārif)は広範な読者層を視野に入れたものだが、その内容は天地創造から執筆時点におけるまでの歴史事象のエピソード集である。⁽²⁵⁾

これら2作品とは異なって『情報の泉』('Uyūn al-Akhbār)はその網羅性、体系性ゆえに百科全書の嚆矢と見なされている。表題の泉('ayn, 'uyūn)は精髓を含意し、知識人・教養人(アディーブ)に要求される広汎な知識のうち、その最良の部分が摘出されたことを示す。蓄積された膨大な諸情報(khabar)を精査して選び出し、それらを部門(bāb)別に配列する。⁽²⁶⁾

イブン・クタイバは摘出した諸情報を権力・為政者(sulṭān)、戦争(harb)から始まって女性(nisā')に終わる10部門に分ける。この知識を天下国家の経綸に始まり人倫に到る部門に配列することにより、イブン・クタイバは流布する知識を分類、階層化し、体系化した。⁽²⁷⁾この編集態度はイブン・アブド・ラッビヒによって踏襲され、その分析

(21) *EAL*, sv. anthologies, medieval(H. Kilpatrick). アダブ作品の倫理性に関しては Sperl 論文と岡崎(印刷中)参照。

(22) フーコーはボルヘスの著作を引いて「中国の百科全書」の網羅性、分類法の独自性を指摘する。Foucault(渡辺・佐々木訳)、13頁～18頁。またマイヤーは百科全書の機能と目的を扱う論文の冒頭で、フーコーのこの文言を引用する。Meier, p. 103. 百科全書の基本要件に関しては、Bouard, pp. 281-288; Meier, pp. 103-105; Ribémont, p. 48, 参照。

(23) Gelder は、単なる事実の列挙に止まり、体系性が欠如しているゆえに、マスウディーの『黄金牧場』は「百科全書」の資格を欠くと見なす。ジャーヒズ『動物誌』にも同様の判断が下されている。Gelder, pp. 257-258; Chapoutot-Remadi, p. 39; *EAL*, sv. encyclopedias, medieval(H. Kilpatrick).

(24) Pellat(1966), pp. 638-639. アダブ研究の先鞭をつけた Nallino は、イスラーム暦3世紀に、法官(カーディー)、書記官僚(カーティブ)、陪食者(ナディーム)、等の特定の集団、階層向けの作法書、指南書が書かれるようになったと指摘し、その嚆矢をイブン・クタイバの『書記のアダブ書』とする。Nallinoはこのジャンルに属する書物に *règles, préceptes* の用語を用いる。Nallino, p. 18. 岡崎(印刷中)、参照。

(25) Paret, p. 78; Pellat(1966), p. 639; Gelder, p. 252.

(26) ゲルダールは Choice Reports と訳す。Gelder, p. 252, p. 245; Paret, pp. 76-80.

(27) 『情報の泉』は序文(muqaddima)で目次と各部門の簡単な紹介を行う。'Uyūn, pp. 49-52. Cf. Lecomte, pp. 423-424. 目次を列挙すれば、①権力、②戦争、③為政者の権威、④性格・倫理、⑤知識・雄弁、⑥禁欲、⑦同胞愛、⑧欲望、⑨飲食、⑩女性、となり、明らかに天下国家の経綸から社会、さらに人倫関係へと亘る階層分けがなされている。

度が増される。

イブン・クタイバ同様、イブン・アブド・ラッビヒは『比類なき首飾り』(al-ʿIqd al-Farīd)において、集積情報を25部門(kitāb)に分類して配列する。そして各部門には、ルビー、瑪瑙、等、貴石の名が冠されており、内容的には中心部の第13章を挟んで各部門は対称をなしている。つまり、編者、アブド・ラッビヒは、首飾りが中心の要石(wāsiṭa)によって一本に繋がれているごとく、全世界の知識は全て一つに繋がっており、相関関係をなしているという世界観を表明したのである。⁽²⁸⁾そして、その表題で、このような世界観に基づく著作は比類なく(farīd)、世に一本しかないことを自負する。

イブン・アブド・ラッビヒはイブン・クタイバの響に倣い①権力(sulṭān)を冒頭に置き、②戦争、③系譜、④代表派遣(wuḥūd)、⑤説教、⑥学識(ʿilm)と教養(adab)と順次分類配置し、③気質、④飲食、⑤娯楽で記述を終える。イブン・クタイバ『情報の泉』同様、政治、宗教から個人に関する情報へと到る配列法を採用して、知識を階層付けている。⁽²⁹⁾

このようにしてイブン・アブド・ラッビヒはイブン・クタイバに比してより広範囲の対象を取り上げ、一層精緻な体系化を計った。その事項の採用と分類両面に亘る編集態度はThaʿālibī(1038年没)ら、後続の情報や逸話の撰集編纂者に受け継がれていく。しかしながら、イブン・クタイバ、イブン・アブド・ラッビヒ両者が取った分類法は科学的、客観的なものではなく、あくまで経験に基づく主観的なものであった。さらに、情報の採用基準はその重要性ではなく、倫理と文体に置かれ、ムスリムの行動規範となるべき内容で、かつ、アディーブが暗記し、引用するに相応しい文章の洗練度に置かれていた。この『情報の泉』や『比類なき首飾り』に見られる知識の分類と採用基準の両面における特徴が、すなわち、「全ての分野を少しずつ」というアダブ的精神に基づいて編纂されたアダブ的百科全書の特徴であり、限界でもあった。⁽³⁰⁾この分類法、採用基準両面に亘る限界を脱して、真の百科全書、つまり、知識全般を客観的、科学的尺度に基づいて配列し、解説する著作の出現には、まず知の総体を分類する作業が必須であった。

3. 学知の分類

アラブ・イスラーム文化において、知識や学問分野全般を一定の尺度に則って分類しようとする試みは、哲学者、al-Kindī(866年?没)を嚆矢とし、10世紀に到り、集地的

(28) 冒頭に目次を置いている。al-ʿIqd, pp. 7-8. 各部門の表題は第13章「説教」(al-khuṭab)に付された「中心の要石」(al-wāsiṭa)を挟んで、左右対称の章題(貴石・宝石名)が付けられている。例えば、第1章と第25章は真珠(luʿluʾa)、第5章と21章は珊瑚(marjān)、第10章と16章は類稀な真珠(yafima)、と各々題されている。

(29) Gelder, p. 253.

(30) アダブ的撰集、詩撰集の採用基準は、洗練された文体と倫理的、模範的な内容双方に置かれたことは、注(21)、参照。アダブを修得しようと目論む者たちは、アダブ書や撰集を熟読し、その倫理的な内容に倣い、同化し、実践に務めた。Holmberg, p. 205. 岡崎(印刷中)、参照。また、換言すれば、アダブ的撰集は「詩の抜粋集」と見なせる程に詩の引用で満ちている。さらに、『情報の泉』や『比類なき首飾り』では、医学、天文学、数学、地理、等、当時、高度に発達し、かつ基本的な学問分野が取り扱われていない。これらの事実にも「アダブ的百科全書」の限界が窺える。Heck, p. 44. なお、ジャンルとしての「アダブ的百科全書」にはキルパトリックの研究があるが、筆者未見。Cf. H. Kilpatrick, "A Genre in Classical Arabic Literature: the *adab* encyclopedia," in *UEAI Proceedings*, 10th, ed. R. Hiltbrand, Edinburgh, 1982.

に行われるようになった。この10世紀における学知分類への関心の高まりは、文法学、法学を筆頭に、歴史学、地理学、等の諸学問の発展、体系化と、翻訳を通しての古典ギリシアの知識の移入という文化事象が強く影響していただろう。⁽³¹⁾ さらに、神の下した知識は有限であり、真摯な努力により学者は知の総体、すなわち、神の叡智の顕現、を理解しようとする思考をムスリム達が持っていたと Bosworth は説く。⁽³²⁾

以上のような知識をめぐる状況下に、10、11世紀に試みられた学知分類を列挙すれば、al-Fārābī (950年没)の『諸学一覧』、al-Khwārizmī Muhammad ibn Yūsuf (997年没)の『学問の鍵』、al-ʿĀmirī (992年没)『イスラームの功業の表明』(al-ʿIlām bi-Manāqib al-Islām)、Ibn Farīghūn (955年以降没)の『諸学大全』(Jawāmiʿ al-ʿUlūm)、さらに、Abū Ḥayyān al-Tawhīdī (1023年没)『学問の書簡』(Risāla fī al-ʿUlūm)、Ibn Hazm (1064年没)の『学問の位階』(Risāla Marātib al-ʿUlūm)等である。⁽³³⁾ これら以外にも、特異な著作としてバグダードの書籍商(al-warrāq)、Ibn al-Nadīm (990年没)が職業上知り得た書籍情報を一定の学問分類に従って纏め上げた『目録書』(Kitāb al-Fihrist)がある。『目録書』は書籍史、学問史のみならず、当時の文化環境、社会情勢の一級資料として重要視されている。⁽³⁴⁾

Heinrichs が述べるように、ファーラービーらの著述意図や内容は一様ではないが、その着眼点の独創性、対象の網羅性、同時代のみならず、後世への影響力の大きさから見れば、ファーラービーとフワーリズミーの2作品が際立つ。⁽³⁵⁾ 前者は夙にアリストテレスに次ぐ「第二の師」(al-muʿallim al-thānī)の異称で知られており、ムスリム最初の偉

(31) イスラーム圏における学知分類の概略は、事典、「学問(イスラムの)」(佐藤次高)、中村、37頁～41頁、308頁～309頁、注(2)、参照。10世紀における知識分類の叢生に関しては、Bosworth, pp. 101-102; Gelder, p. 250; Heinrichs, pp. 120-121; Chapoutot-Remadi, p. 39、参照。また、当該世紀に対して「イスラームのルネサンスの世紀」の呼称を与えるのは A. Mez を濫觴とし、J. Kraemer が同調した。Chapoutot-Remadi, p. 39; Heinrichs, p. 120; Gelder, p. 250; Heck, p. 29。また、カラタイは、多くの歴史書で10世紀を「アラブ・イスラーム思想の黄金時代」と見なされていると指摘し、知的沸騰(intellectual effervescence)と文化的ダイナミズムを特徴とすると指摘する。Callatay, p. xiv。翻訳文献の役割に関しては、Gutas (山本訳)、参照。特に終章「翻訳と歴史」が翻訳活動の意義を総括していて有益。169頁～196頁。哲学者、al-Kindīの『学問分類論』(Fī aqsām al-ʿulūm)は学知分類の第一号の荣誉を担うだけで、イスラーム思想史上、何らのインパクトを与えるものではないとの評価を受けている。Bakar, p. 133, fn. 10; Heinrichs, p. 120, fn. 5。

(32) Bosworth, pp. 101-102。

(33) Bakar, p. xiii; Gelder, p. 250; Heinrichs, p. 121。

(34) イブン・アンナディームの伝記情報、『目録書』の評価は、EI, sv. Ibn al-Nadīm(J. Fück), 参照。『目録書』では、学識を10分野(maqāla)に大別し、さらに下位分類(fann)を行う。それらを列挙すれば、①言語・コーラン、②文法・語彙、③歴史・系譜、④詩、⑤宗教、⑥法学、⑦哲学・数学・天文学・医学、⑧架空物語・呪術、⑨非アラブ関連、⑩錬金術、となる。イブン・アンナディームはこの分類基準を特に説明することはないが、①～④がアダブ関係、⑤～⑥が宗教、⑦が哲学・科学、⑧～⑩が非科学、と分類できよう。Heinrichs, p. 130; Heck, pp. 45-53。

(35) 網羅性、体系性に関し、タウヒーディーの『学問の書簡』と比較してみると、ファーラービーの『諸学一覧』の価値が分かる。タウヒーディーは、法学(al-fiqh)、コーラン、スンナ・ハディース、類推(qiyās)、神学(kalām)、文法、言語、論理学(al-mantiq)、医学、天文学(ʿilm ahwāl al-kawākib)・占星術(al-ahkām fī al-ʿumūr al-mustaqbala)、数学(al-hisāb al-mufrad bi-al-ʿadad)、幾何学(al-handasa)、修辭学(al-balāgha)、スーフィー(al-taṣawwuf)、の諸学を列挙するのみで、何らの分類を行わず、解説も簡略である。Al-Tawhīdī. Cf. Bergé, pp. 258-272。

大な哲学者と見なされている。⁽³⁶⁾ また後者の経歴は不明な点が多いが、同名の数学者や高名な文筆家と混同してはいけない。⁽³⁷⁾

イスラーム圏はもとより、ヨーロッパ各国語に翻訳され、長く影響を及ぼしたファーラービーの『諸学一覧』は、その冒頭で、当該書は初学者が誤り無く諸学問を修得するための手引書であり、どの学問がより優れ (afḍal)、一層有益 (anfa') で、信頼に足る (awṭhaq) かを識別できると明言する。⁽³⁸⁾

著作意図を示した後に目次を置き、流布する全学問 (al-'ulūm al-mashhūra) を、①言語学 ('ilm al-lisān)、②論理学 ('ilm al-manṭiq)、③数学的基礎学 ('ulūm al-ta'ālīm)、④自然学 ('ilm al-ṭabī'ī)・形而上学 (al-'ilm al-ilāhī)、⑤政治学 (al-'ilm al-madani)・法学 ('ilm al-fiqh)・神学 ('ilm al-kalām) の5部門 (faṣl) に大別し、さらにその各々を下位区分し総計 39 の学問分野を取り扱うと述べる。⁽³⁹⁾

この目次で注目すべきは、ファーラービーが諸学の中で論理学を最重要視し、その基礎をなす言語関連学を冒頭に置き、対照的に、イスラーム文化の核をなす法学、神学を政治学と並べて最後尾に配列している点である。⁽⁴⁰⁾ この配列順序に関して、ファーラービーは抽象思考を要する諸学から、現実的、実践的な学問分野へと、学識を位階付けており、そこにこの哲学者の独創性が窺えられると Bakar は述べる。⁽⁴¹⁾

ファーラービーの造語である言語学 ('ilm al-lisān) を扱う第1部は、思考の基礎をなし、全ての学問の前提となる言語学を、言語事象の観察と言語規則の規定という2分野に分ける。この分類法は現代言語学における記述文法 (descriptive grammar) と規範文法 (prescriptive grammar) の区別に準じており、ここでは辞書・語彙論 (luḡha)、形態論 (ṣarifi)、統語論 (naḥw)、等言語に関わる全ての分野と詩作法とが扱われている。彼は暗記 (ḥifẓ) — 文法規則 ('ilm qawānīn)、単純 (mufrada) — 複合 (murakkaba)、等の二項対立の叙述法を取って対称を際立たせ、理解を容易にする工夫をなしている。⁽⁴²⁾ 彼はペルシア語、トルコ語を解し、アラビア語の他に 70 言語を理解したと言い伝えられているが、ファーラービーの言語に関する関心の高さをこの『諸学一覧』においても示している。⁽⁴³⁾

(36) 伝記的事実は、*El*, sv. al-Fārābī (R. Walzer); Corbin (黒田・柏木訳), 174 頁、188 頁 ~ 197 頁、参照。Bakar はイスラーム文化における学知分類に、ファーラービー、ガザリー、シーラーズィーの3人をその代表者を選んだ理由を、この3者ともにある時代の主要な学派 (a major intellectual school) の創始者かその代表者であるからだと説明する。また、特にファーラービーの場合、影響力を有す最初の分類者ゆえだと解説する。Bakar, pp. 2-3.

(37) Bosworth, p. 100. サーマーン朝に仕え、バルヒー学派に属していたと推測される以外に、詳しい経歴は不明。Cf. *El*, sv. Al-Khwārazmī, Abū 'Abd Allāh Muḥammad (A. I. Sabra); Bosworth, p. 100.

(38) al-Fārābī, *texto arabe*, p. 8. なお、アラビア語書籍における「序文」の意義に関しては、Freimark、参照。特に第3章 (序文のトポス) とイブン・クタイバの『書記のアダブ』『情報の泉』『知識の書』を扱った部分は本稿と密接な関連を持つ。Freimark, pp. 29-63, pp. 78-83.

(39) 『諸学一覧』は冒頭に目次を置く。al-Fārābī, *texto arabe*, pp. 7-8. Cf. Mahdi, p. 115; Gardet and Anawati, p. 106. 「数学的基礎学」という表現・分類は、後述のイフワーン・アッサファー『書簡集』の分類に関する、注 (65)、参照。

(40) Heck, pp. 36-37. Heinrichs, pp. 124-125.

(41) Bakar, p. 124. 他方、マフディーは、「目次」の5点の効用を挙げ、さらに数学の重視を指摘する。Mahdi, pp. 114-116; McKeon, p. 156.

(42) Heinrichs, pp. 124-126.

(43) Corbin (黒田・柏木訳)、188 頁; Pellat (1966), p. 646.

前述のように、『諸学一覧』における知識分類で最も特徴的なのが、政治学と並んで法学と神学が同一のカテゴリーに組み入れられていることである。Mahdi は、古典イスラーム哲学の顕著な特徴を、政治哲学の卓越性と、法学と神学を政治哲学に組み入れて哲学の一分野に扱う点にあるとし、この思考法、分類法の嚆矢をファーラービーの『諸学一覧』に見出している。⁽⁴⁴⁾ この個所でファーラービーは第4章の表題であるイルムに代えて、法学と神学に学芸 (šinā'a) の語を用いる。これにより両者の実学性と、聖法をもたらす立法者 (wāḍi' al-sharī'a) の存在を前提とした学問である共通性を示す。⁽⁴⁵⁾ イスラーム世界では共通した対象を扱うところから、元来、法学と神学は長く未分化の状況であり、その一端をこの分類は現している。⁽⁴⁶⁾

『諸学一覧』はその体系性、網羅性、知識分類において独自性を発揮しているが、錬金術や夢解釈等の秘教的分野 (khafiyya, gharība) が除外されている点に、合理的な哲学者の著作の特長が現れている。同様に、医学、建築学、農業、航海術、等の実用学が含まれていないのは、これら実用科学が何らの論理的思考を要しない理由による。⁽⁴⁷⁾ また、第3部「数学的基礎諸学」において天文学と並んで音楽に1章が割かれており、ピウタゴラスに倣う学問分類の伝統を受け継いでいることを示している。音楽の章では、法学や神学と同様に、アリストテレスに従って、理論 ('ilm al-mūsīqā al-naẓariyya)、実践 ('ilm al-mūsīqā al-'amaliyya) の2方向から解説されている。⁽⁴⁸⁾

以上の諸点を総合して、『諸学一覧』はギリシア哲学の影響を色濃く留め、イスラーム諸学とギリシア伝来の諸学問との融合、整合化が実現されたと評価されている。⁽⁴⁹⁾ そして、この『諸学一覧』はヘブライ語やラテン語に翻訳されて、以後長期に亘って学問論、知識論の分野で影響力を保持した。⁽⁵⁰⁾

ファーラービーの『諸学一覧』がアリストテレスの伝統を継ぐヘレニズム的著作とすれば、フワーリズミーの『学問の鍵』は行政に携わる書記官僚 (kātib, kuttāb) 向けに書かれた手引書であり、純粹にイスラーム文化から生み出された著作と評価できよう。⁽⁵¹⁾ サーマーン朝 (873 年～999 年) の官僚であったフワーリズミーは、職務執行に要求される知識、特に専門用語、を分類、解説する書を編纂してワジールに献呈したと考えら

(44) Mahdi, p. 113.

(45) Heinrichs, p. 124; Mahdi, p. 131.

(46) *El*, sv. fiḵḵ (I. Goldziher [J. Schacht]). 中村、37 頁～48 頁、特に、47 頁。

(47) Heinrichs, p. 125; Bakar, p. 126.

(48) プラトンとアリストテレスの学問論は後世へ絶大な影響を及ぼしたが、それらはアレクサンドリア学派に継承され、さらに、数学的4学科と言語学的3学科から成る「自由7学科」の形成へと到る。論理学、数学的基礎学の分類に見られるように、古代ギリシアの伝統はキンディーやファーラービー等のイスラームの哲学者に受容されていく。「自由7科」の形成に関しては、廣川論文参照。

(49) Heinrichs, p. 122; Bakar, p. 126; Heck, pp. 36-37.

(50) 本稿の使用テキストである Palencia 編集本には、Girardo Cremonensi (クレモナのジェラルド) によるラテン語訳とその注解本が併載されている。イスラーム圏外での『諸学一覧』の受容に関しては、Bosworth, p. 101, fn. 8, fn. 9; Gardet and Anawati, p. 102; Mahdi, p. 145, notes; Pellat (1966), p. 646. 木下は西洋ラテン世界における『諸学一覧』の受容史を論じ、グンディサリヌスとクレモナのジェラルドゥス訳の比較を行っている。木下、154 頁～157 頁。

(51) Heck, pp. 39-40.

れている。⁽⁵²⁾

フワーリズミーは、「知識の鍵となる物や様々な技術の基礎 (awā'il al-ṣinā'āt)、さらに専門用語 (iṣṭilāhāt) を一書に纏めようと決心した」と著述意図を明かす。⁽⁵³⁾そして、書記官僚に必須の知識を2大別し (maqālatayn)、アラブ・イスラーム学 ('ulūm al-sharī'a wa-mā yaqtarin bihā min al-'ulūm al-'arabiyya) と外来学 ('ulūm al-'ajam min al-Yūnāniyyīn wa-ghayrihim min al-umam) に分ける。この知識を自生的なアラブ学と外来学に2分する点で、当該書はムスリムの伝統的な思考を受け継いでいる。⁽⁵⁴⁾そして、外来学の中でも falsafa と総称される哲学は、保守的な宗教者から絶えず反発、排斥を受けていた。⁽⁵⁵⁾

第1部、アラブ・イスラーム学は、法学 (fiqh)、神学 (kalām)、文法 (nahw)、書記術 (kitāba)、詩作と韻律 (shi'r wa-'arūd)、歴史 (akhbār)、の6分野 (bāb, abwāb) を収め、さらに下位分類 (faṣl) して記述する。イスラーム学の核心を占める法学から初め、コーラン、スンナ、イジュマーから成る法源を説明する。

注目に値するのは、神学が第1部のアラブ・イスラーム学に分類されていることであり、逆に、コーラン解釈学が第1部に収載されていない点である。通常、思弁神学 (カラム) はギリシア由来の学問とされているが、フワーリズミーにおいては、神学は分派学 (firaq) と見なされて、アラブ・イスラーム自生の学問分野に分類配置されたのである。⁽⁵⁶⁾さらに、分派学においては、イスラームのみならず、キリスト教、ユダヤ教内の各派はおろか、二元論的なマニ教やゾロアスター教にまで説明が及んでいる。⁽⁵⁷⁾これは、官僚はその職掌上、イスラーム圏内に居住する全住民に関する知識を把握しておくことが要求されたことを示しており、官僚向けというこの著作の性格をよく表している。⁽⁵⁸⁾このことは、煩瑣に亘るコーラン解釈学は書記官僚には無用な知識とする態度と通底する。

また、ファーラービーとは異なって、文法学がアラブ・イスラーム学に収載されており、著者が言語と宗教の緊密な関係を重視していることを示す。さらに、文法学を法学、神学に次いで3番目に配置してその重要性を明示する。⁽⁵⁹⁾

『学問の鍵』第2部、外来学は、哲学、論理学、医学、数学 ('ilm al-'adad)、工学 (al-handasa)、天文学、音楽、機械学 (al-hiyal)、錬金術・化学 (al-kīmiyā) の9分野を扱う。ゆえに、第1部、第2部で総計15分野の知識、学問を取り扱い、それらが95

(52) 伝記的事実は、*EI*, sv. al-Khwārazmī, Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. Aḥmad (A. I. Sabra); *EAL*, sv. al-Khwārazmī, Muḥammad ibn Aḥmad ibn Yūsuf (O. Leaman). 参照。

(53) al-Khwārazmī, pp. 2-3; Bosworth, p. 100.

(54) al-Khwārazmī, p. 5; Gardet and Anawati, pp. 111-112; Pellat (1966), p. 633; Bosworth, p. 102. 部門を表すのに「maqāla」の語を充てるのは、医学文献やアリストテレスの「オルガノン」の翻訳において、9世紀に初めて用いられたという指摘がなされている。Blachère, p. 17.

(55) Gardet and Anawati, p. 111; Bosworth, p. 102; *EI*, sv. falāsifa (R. Arnaldez). バカルはファーラービーの著作意図を、敵視されている論理学と哲学の普及、一般化を図っていたと推測する。Bakar, p. 125.

(56) Heck, p. 41. p. 53. タウヒーディーは知性 ('aql) に関して法学 (fiqh) と神学 (kalām) は関連性を有すと主張する。Heck, p. 53. アラブ・イスラーム文化、特に学知の分類、における哲学 (falsafa) とカラム神学 (kalām) との複雑で微妙な関係は、Corbin (黒田・柏木訳)、ix-x 頁、125 頁～126 頁、147 頁、参照。

(57) al-Khwārazmī, pp. 22-41.

(58) Heck, p. 41.

(59) Heinrichs, p. 129.

に下位分類されて説明されており、全体として総合的、分析的な知識分類法となっている。

『学問の鍵』は知識の分類において整然とした構造を有し、その点で斬新さを発揮しているが、あくまで、事より辞に中心を置いた辞書、用語集であって、事物の分類と同時に、それらの解説を核とする百科全書とは見なせない。⁽⁶⁰⁾ 自己の執筆動機を、「raj'a」の一語が多様な意味で用いられている事実にあるとし、冒頭でその識別を詳述するのは、著者の関心の所在をよく示している。⁽⁶¹⁾ また、内容面においても、官僚に必須の知識のみが収載されており、広汎な読者を対象としていないのも、百科全書としての資格に欠ける一要素である。本文冒頭で解説されている、羊や牛の成育年により異なる呼称は、課税には必須の知識ではあっても、一般人には無用の知識である。⁽⁶²⁾

この知識、学問を分類し、体系化する試みは、イブン・ハズムやタウヒーディーらに引き継がれたが、何れも摘要、手引き集の域を出ず、百科全書とは評価し難い。知識の分類と詳細な内容説明は純粋同胞団によって行われる。

4. イフワーン・アッサファー『書簡集』

推定 10 世紀に、バスラを拠点とし、イスマール派と密接な関連を有する秘密結社が、霊魂の救済を目的とする『書簡集』を著した。この全 4 巻、51 編の書簡論文から成る一大集成は、詳細で体系的な知識の分類、叙述対象の網羅性、検索機能への配慮、結社員向けという限定はつくが、専門家向けではなく一般読者を対象とする点、の各面から見て、「百科全書」の資格を有すると判断できる。⁽⁶³⁾

(60) Heck を筆頭に、『学問の鍵』を百科全書に分類する研究者がいる一方で、ハインリークスは明白に dictionary の用語を使う。Heinrichs, pp. 128-129. Cf. Pellat(1966), pp. 646-647. 百科全書研究の第一歩はその定義付けであるが、事を主とする「百科事典・百科全書」と辞を主とする「辞書・辞典」の区別は研究者を悩ます難事であり、表題 (title) や分量 (volume) での区分はできない。例えば、Dictionary of National Biography, Dictionary of Chinese History, と題された著作を「辞書」と見なすことはできないだろう。要は、本稿で行っているように、その著作意図と編集態度の相違にしか区別の指標を求めることはできないだろう。ファウラーが結論づけているように、辞書と事典の間には曖昧な領域があることを認めざるをえない。そして、「良い辞書は単語の百科全書であるべきだ」とし、単語の使用法と定義のみならず、引用に基づく用例の歴史、語源等を記載すべきと論じる。Cf. Fowler, p. 6, pp. 12-13. イスラム圏に関しては、事典、「辞書/事典 (イスラムの)」(三浦徹)、参照。また、事より辞を中心とする著作に関し、勝村はヨーロッパにおける「一覧表の学・名称学」(onomasticon) に言及する。勝村、14 頁～15 頁。Cf. Blachère, p. 8.

(61) al-Khwārazmī, pp. 3-4. Cf. Bosworth, p. 100; Heinrichs, pp. 128-129.

(62) 断食と巡礼の用語解説に挟まれて、第 1 章「法学」第 5 項において、ラクダ (ibil)、ウシ (baqar)、ヤギ (ghanam)、の成育年別の呼称が説明されている。al-Khwārazmī, pp. 12-13. Cf. Heck, pp. 40-41.

(63) 『書簡集』の書簡 (risāla) 数を 52 とする研究者もいるが、最後に置かれ、魔術的 (sihr) なテーマ等を扱う第 52 書簡は、後世の偽作が挿入されたとする意見が多い。また、17 という特別な数の重要性から見ても、17×3 の 51 を書簡数と考えるのは妥当だと思われる。(『書簡集』第 2 部は 17 の書簡から構成されている)。52 説を取るのは、Pellat(1966), p. 647; Gelder, p. 255; Chapoutot-Remadi, p. 42; Gardet and Anawati, p. 107, である。他方、51 説に立つのは以下を参照。Chapoutot-Remadi, p. 42ff; Diwald, p. 27; Nasr, p. 38, fn. 61; Netton, p. 2; Corbin (黒田・柏木訳)、160 頁～161 頁、菊地 (訳)、208 頁、注 17。これらの意見を踏まえてカラタイは、書簡数の議論は生産的でなく、『書簡集』の全体プラン、知識の配列順序と分類基準、という問題のほうがより重要だと主張するが、本稿の筆者も同意見である。Callatay, pp. 15-16.

『書簡集』の著者（達）は、自らを「純粋な同胞と忠実な兄弟」（*ikhwān al-safā' wa-khullān al-wafā'*）と名乗る以外に、著者、著作年、著作地、集団の活動内容、等々に関して言及することなく、全てを闇の中に閉ざしている。それゆえ、この集団の実態や、『書簡集』にまつわる疑問に関し、解明の全てをその著作内容から類推し、判断するしか方法はなく、多くの点で未だ研究者間に一致した定説はない。⁽⁶⁴⁾

『書簡集』は修得すべき全知識を①基礎科学（*riyādiyya*）、⁽⁶⁵⁾ ②宗教諸学（*al-shar'iya al-wad'iya*）、③哲学（*al-falsafiya al-haqiqiya*）に大別する。そして、①には識字能力に関する知識や、商工業や農業の知識、さらに韻律等を入れ、②には啓示やハディース、法学、スーフィズム、夢解釈等を含める。そして、③には数学を核として自然科学、天文学を含め、さらに神学（*al-'ulūm al-ilāhiya*）と政治学（*'ilm al-siyāsa*）をも加える。⁽⁶⁶⁾

『書簡集』はこのように全知識を組織的に体系立て、その修得を目標とするが、実際の学習においては、学習者の心身の発達度を考慮し、認識能力、理解力に応じて教授する必要があると説く。そして個人の成長段階を、①自然的法則に則って鍛錬される時代（15歳～30歳）、②世俗的知識を修得した段階（30歳～40歳）、③「シャリーア」の内的真実を理解できる段階（40歳以上）、④内的な真実により全ての物事が理解できるようになった段階（50歳以上）、に分ける。⁽⁶⁷⁾ そして、生誕より第1段階に到る時期は、言語を中心とした基礎的知識の修得に充てられる時期とし、他方、第3段階は預言者的能力、第4段階は天使的能力、を前提とするので、『書簡集』は学問修得に適した第1、第2段階、すなわち、15歳～40歳までの学習者の教育に重点を置く。⁽⁶⁸⁾

このような認識に基づいて、『書簡集』は全知識を4部門（*qism, aqsām*）に分け、学習者の理解力に応じて順次配置する。それらを列挙すれば、第1部、数学的なもの（14編）、第2部、物体的で自然的なもの（17編）、第3部、霊魂的で知性的なもの（10編）、第4部、神的律法とシャリーアについての知識（10編）、となる。そして各編（書簡、

(64) Netton は、これまでの『書簡集』研究は作者の正体と著作年の解明に集中しており、内容分析は等閑視される傾向にあった、と指摘する。Netton, p. 1. Cf. Widengren, p. 182. 「誠実」「忠実」「清純」等の意味を有する「*aṣ-ṣafā'*」の意味、語源をめぐる議論は、Diwald, pp. 21-22; Netton, pp. 5-7; Callatay, p. 3; Corbin（黒田・柏木訳）、p. 159, 参照。英文では Brethren of Purity、あるいは Sincere Brethren、と訳されることが多いが、Goldziher は Faithful Companions と訳すほうが適切であると主張する。注（68）、参照。Cf. Widengren, p. 182.; EI, sv. Ikhwān al-ṣafā'.

(65) 'ilm al-riyādiyya は直訳すれば「訓練学」であるが、これには知的訓練と肉体訓練双方の意味が含まれている。これらの訓練はあらゆる学問の根底となるので「基礎科学」の訳語を充てた。Callatay, pp. 61-63; Heinrichs, p. 127, fn. 19; al-Ghazālī（黒田訳）、96頁、訳注5、参照。

(66) *Rasā'il*, vol. I, pp. 266-275. Cf. Nasr, pp. 40-43; Gardet and Anawati, pp. 108-109.

(67) *Rasā'il*, vol. III, pp. 195-196. 菊地（訳）、230頁。Cf. Nasr, pp. 31-32; Corbin（黒田・柏木訳）、p. 161; 菊地（訳）、p. 208, fn. 19; Tibawi, pp. 56-57; Nanji, pp. 263-264; Marquet(1991), p. 49.

(68) 『書簡集』は記述順序に則る段階的な学習の重要性を強調するが、それは断片的な知識の曲解や悪用を危惧するためであり、説明の一部が秘儀とされたり比喩的に行われたりしている理由でもある。EI, sv. Ikhwān al-ṣafā'. 『書簡集』はその形式、内容により独習可能であるが、反面で、適切な指導者（*ustādh, ḥakīm*）と教育の場（*majlis*）の重要性を説く。そして冒頭の第1書簡と終末の第45書簡で、友愛、相互扶助の必要性を説き、イブン・ムカッファア著『カリールとディムナ物語』中の、「網にかかったハトが仲間の助けにより脱出する話の意義を熟考するようにと諭す。Goldziher はこの「首輪を付けたハト」の物語から清純な兄弟（*ikhwān ṣafā'*）の呼称が取られていると主張している。注（64）参照。*Rasā'il*, vol. I, p. 100, vol. IV, pp. 41-60. Cf. Netton, pp. 3-5; Tibawi, pp. 56-58; Callatay, p. 2.

risāla) はさらに下位分類 (faṣl) されて詳細に解説される。⁽⁶⁹⁾

この膨大な知識の集成は、「靈魂を錬磨し (taḥdhīb)、性質を純化し (taḥhīr, iṣlāh al-akhḷāq)、諸学問を修得することにより自己認識を完成させ、もって来世に備える」ために必修のものと見なされ、上記の順序で修得すべきものとされていた。⁽⁷⁰⁾つまり、『書簡集』は全知識を位階付けたのである。ここに著者(達)の明解な人間観、世界観、宇宙観が現れている。この生成消滅界 ('ālam al-kawn wa-al-fasād) に閉じ込められている人間は、覚醒してその牢獄から脱出しなければならない。⁽⁷¹⁾すなわち、人間の生の目的は忘却してしまった故郷、原郷、に帰還することであり、自己の省察、人間靈魂への洞察を通してこの自然という牢獄を脱することができるとする。そして、この人間靈魂の救済は知識 (ma'rifa, gnosis) を介してのみ可能となる、と以下のように説く。⁽⁷²⁾

兄弟よ、預言者たちに下された書物で示された知識 (ma'rifa) を求めるように努力せよ。...そうすれば、それらの叡知 ('aql) がそなた自身のものとなるであろうし、彼らの靈魂の純粹さがそなたのものとなると分かるであろう。怠慢の眠りから目を覚まし、無知のまどろみから目覚めるように。さらに、学識者たち (al-'ulamā') と同様の幸せな生活をおくり、天上界 (malakūt al-samā') に向かう熱意 (himmā) を燃やせ。そうすれば、そなたは来世 (fī al-ākhirā) で幸福になれるであろう。⁽⁷³⁾

『書簡集』はこのように、靈魂の救済と諸学の修得の必要性を関連付ける。そして、ミクロコスモスたる人体とマクロコスモスたる宇宙の照応関係を説く。『書簡集』第2部「物体的で自然的なもの」の第2書簡「靈魂の矯正と人格の錬磨に関する空と宇宙の痕跡」において、両者の関係はこう解説されている。

兄弟よ、賢者達 (al-hukamā') が以下のように言っているその意味を知れ。すなわち、大宇宙 (al-'ālam) とは7つの天と地のことであり、その天地の間は全ての生成物 (al-khalā'iq) から成り立っているのである。また大宇宙は全ての星辰、天層、生成物質、において単一の物体であるゆえに、賢者達はそれを偉大なる人間 (insān kabīr) と名付けている。また大宇宙は単一の靈魂から成り立ち、その靈魂が全組織に行き渡っているが、それは人体が単一の靈魂からなり、それが全器官に行き渡っているのと同様である。⁽⁷⁴⁾

(69) 『書簡集』は冒頭に23頁に亘る詳細な目次 (fihrist al-rasā'il) を置く。Rasā'il, vol. I, pp. 21-43. Cf. Gardet and Anawati, pp. 108-109; Nasr, pp. 42-43; Chapoutot-Remadi, p. 43. 目次の日本語訳は菊地(訳)、202頁～203頁。

(70) Rasā'il, vol. I, p. 47, p. 258; vol. IV, pp. 8-13. Cf., Diwald, p. 31; Widengren, p. 183, p. 187; Heinrichs, p. 127; Tibawi, p. 60.

(71) Rasā'il, vol. II, p. 61. Cf. Widengren, pp. 186-187; Marquet(1961), p. 226.

(72) 『書簡集』では、「真実の知識 (al-ma'ārif al-haqīqiyya)、善き気質、正しい意見、清廉な行い、でもって靈魂を完成させ」ようとする。Rasā'il, vol. I, p. 286. Cf. Marquet(1961), p. 234; Widengren, p. 189.

(73) Rasā'il, vol. II, pp. 60-61. Cf. Widengren, p. 187.

(74) Rasā'il, vol. II, pp. 24-25. Cf. Nasr, p. 67.

このマイクロコスモスとマクロコスモスのアナロジーは、『書簡集』の著者（達）が宇宙論に関してピタゴラス以来の学統を受け継いでいることを示すのみならず、両者の照応関係を説くことで、複雑な宇宙の構造を非専門家である一般人、初学者（murid）に近づき易くし、理解を容易にしようとする『書簡集』の基本理念を現している。⁽⁷⁵⁾

このような基本認識、教育目標に則って、『書簡集』は第1段階の自然界の説明から始め、その基礎をなす数の解説を行う。

ファーラービーが言語学に則って世界を理解し、セビリヤのイシドロスが語源に即して神の叡智を読み取ろうとしたごとく、『書簡集』の著者（達）は神慮を数字に基づいて解説しようとする。⁽⁷⁶⁾ このピタゴラスを嚆矢とする試みの背後には、世界、即ち神の叡智、は人間理性によって理解可能であるとする基本的な思考がある。先述のように、生成消滅の自然界（物質世界）という牢獄に閉じ込められている人間靈魂の救済には、靈魂の本質の正確な認識と、それを成り立たせている要素たる数の理解が必要である。このように、「万物は数なり」とし、全ては1から発しており、数の構成要素をすべての存在の構成要素と見なすゆえに数学的知識を重視し、その学習を最優先する。⁽⁷⁷⁾ そして、数の論理の具体的な証拠としての音楽が重要視される理由も、この思考に基づく。⁽⁷⁸⁾

さて、『書簡集』を百科全書の観点から考察すれば、いかなる特質を有するのであるうか。特筆すべきは、内容の網羅性、収録されている知識の龐大さと、それを支える引用の広汎さである。人知のアラベスク、知の混沌と評すべき程に、『書簡集』には古今東西からの多岐に亘る文献からの引用が行われている。⁽⁷⁹⁾ その引証の意図は、世界のあらゆる事象を取り上げ、一つの問題に関し多方面から考察することにより理解を確実にするためである。⁽⁸⁰⁾ 学問の総体を分類し、知識の見取り図を示すのが百科全書の役割の

(75) *Ibid.*, pp. 66-74; Marquet(1961), p. 226; Gelder, p. 256; Nanji, p. 268. 『書簡集』第3部「靈魂的で知性的なもの」の第1書簡（第32書簡）、第2書簡（第33書簡）は、ピタゴラスの見解に基づくイフワーンの宇宙論を展開しており、数の原理が詳述されている。*Rasā'il*, vol. III, pp. 178-211. 菊地（訳）、209頁～250頁。Cf. Diwald, pp. 31-128; Nasr, pp. 47-51; Marquet(1961), pp. 227-230;

(76) セビリヤのイシドール (Isidorus Hispalensis) (560年～636年) は『語源』 (*Originum seu Etymologiarum libri XX*) を著し、万物の本質をその語源に基づき解明しようと試みた。この書はその後長く西洋キリスト教世界において影響力を保ち続けた。彼はギリシア以来の伝統を引く自由学芸の観念を整理して、数学的4学科 (quadrivium) と言語的3学科 (trivium) に分類した。この分類法はアルクインらによって継承されていく。木下、154頁、廣川、326頁、参照。Cf. Collison, pp. 33-35; Ribémont, pp. 49-50, p. 54; Meier, pp. 104-105; Bouard, pp. 282-283.

(77) Widengren, p. 183; Marquet(1991), p. 51. 数字の持つ質と量の二面性や、「1は数ではない」とする思考法をピタゴラス学派から継承している『書簡集』の数概念に関しては、三浦が言及している。三浦、261頁～264頁、306頁～307頁。Cf. Nasr, pp. 48-55.

(78) 中世ヨーロッパ文化における「自由4学科」に音楽が含まれるごとく、『書簡集』においても、第一部「数学的なもの」の第5書簡は「音楽」に充てられており、地上の音楽と天上の音楽間に照応を認める。そして、音楽を数学を基とする「自由4学科」に分類するのは、ピタゴラス学派の伝統であり、幾何、算術（数論）、天文、音楽とする。*Rasā'il*, vol. I, pp. 183-241. Cf. Netton, pp. 11-14; Kilpatrick, pp. 142-143; Nasr, p. 45; Callatay, pp. 61-62. 「7自由学科」における「言語的3科」と「数学的4科」の分離に関しては、廣川論文、参照。「自由学芸」の内容については、水落、6頁～11頁。

(79) Marquet(1991), p. 47. Chapoutot-Remadi, pp. 44-45に、ギリシア語著作からの引用元と頻度、さらに他文化圏の著作の引用をまとめている。Gelderは、その著作者の思想を問わずに多様な知識を引用する『書簡集』の編者（達）に、寛容の姿勢を感じ取り、「純粋な兄弟」の呼称の適切さを論じる。Gelder, p. 256.

(80) Diwald, p. 16.

一つとすれば、『書簡集』は十全にその役を果たしている。

次いで注目に値するのは、読者に知識を誤り無く修得させるための種々の工夫が施されている点である。それは『書簡集』冒頭に詳細な目次を置き、知識の見取り図を掲げ、検索機能を強化している点に端的に現れている。さらに、各書簡の冒頭部で当該書簡の目的と、それに先行する書簡の内容を再度要約して相互参照機能に対して配慮がなされている点も注目に値する。⁽⁸¹⁾

また、先述のように、読者の理解度、認識能力、に応じて段階的に知識が記述されているために、読者は絶えず自らの学習進度を確認でき、理解不足を感じると、冒頭の目次を検索し、直ちに必要個所に立ち戻れる点も利用者への配慮の一つであろう。

通常、「書簡論文」(risāla)は公開を前提とした文書であり、その内容は自己の感想を吐露したものや、あるテーマに沿った小論文という主観的な著述である場合が多い。⁽⁸²⁾

しかし、純粋同胞団の『書簡集』は、通常の書簡論文とは異なって客観的な叙述を特徴とし、一人称単数形の使用は非常に限定的である。⁽⁸³⁾さらに、その客観性の一端は引用の広範囲さが示していた。この叙述における客観性も辞書、百科全書に要求される要件の一つである。

このように、『書簡集』の著者(達)は、常に読み手の立場に立ち、読者の利便性を考慮する。そして、絶えず、「兄弟よ」(Yā, Akhī)と呼びかけて学習者を督励し、同内容の説明を繰り返して、理解を確認させる。⁽⁸⁴⁾さらに、比喩を多用し、対話形式の叙述を挿入して理解の促進を図る。⁽⁸⁵⁾その典型例を靈魂と肉体との関係を説明する個所で

(81) 『書簡集』には最後に「要約の書簡」(al-Risāla al-Jāmi'a)が置かれていて、全体を総括する内容となっているが、後世の偽作と見なされている。もし真作とすれば、目次に始まり、内容要約で終わる、利用者の便を考慮した、周到な配慮がなされていることになる。菊地が指摘するように、ナスルの研究はこの「要約の書簡」に基づく点が多く、頻繁に引用されている。菊地(訳)、207頁、注16。Nasr, p. 27, fn. 11, p. 32, p. 34, p. 37, fn. 54, p. 44, p. 46, etc. 「要約の書簡」への言及は、Callatay, pp. 15-16; Diwald, p. 26; *El*, sv. Ikhwān al-ṣafā' (Y. Marquet)、が行っている。

(82) *El*, sv. risāla (A. Arazī & H. Ben-Shammay). 通常『書簡集』(Rasā'il)と呼び習わされている当該書の内容については議論がなされていて、マニュスクリプトを精査して、本来はRasā'ilではなくKitāb(本)であったとの有力な説が出されているが、何れであるにせよ本文内容の解釈には影響しないとする主張もされている。本稿の筆者は後者の説を支持する。Diwald, pp. 16-17; Callatay, p. 3.

(83) 『書簡集』の客観的記述の一端は、第31書簡を除いて、一人称単数形の使用が限定的である点にも現れている。*El*, sv. Ikhwān al-ṣafā' (Y. Marquet).

(84) 各書簡冒頭の定型表現である「敬虔(bārr)で慈悲深い(rahīm)兄弟よ—アッラーがその聖靈(al-rūh)でそなたと我々をお助け下さりますように—以下のことを知れ」に関し、カラタイは、恩着せがましい(patronizing)と感じる読者もいるだろうが、『書簡集』に看取される親密さの一要素とする。Callatay, p. 1.

(85) マクロコスモスとミクロコスモスの照応関係の解説が端的に示しているように、『書簡集』は読者の理解に資するために比喩アナロジーを多用する。比喩(mathal, amthal)を用いるのは、「説明をより明解にし、理解を一層容易にし、教訓を一段と説得的にするためである」。*Rasā'il*, vol. IV, p. 9. 例えば、一者からの流出による生成過程を巡行行為に準える説明や、教育の重要性を説く王子と宮殿の寓話が代表例として挙げられる。*Rasā'il*, vol. II, p. 139, pp. 460-461. Cf. Widengren, p. 184; Marquet(1961), p. 231, fn 2; Nanji, pp. 264-267. 『書簡集』における基本的な認識、思考は数の象徴性である。例えば4の象徴性に関し、4元素、4性質、4体液、季節、方位、風の種類、象限、人生の時期、記数単位、等が列挙される。*Rasā'il*, vol. III, p. 180, pp. 204-205. Diwald, p. 38. 菊地(訳)、211頁、242頁。Cf. Netton, pp. 10-12. また、寓話や対話等、親近感に溢れ、初心者になじみ易い叙述法を取る。最も有名なのが、人間の優越性をめぐる動物との長大な論争(第22書簡)である。また、この「書簡」では詩が頻繁に挿入されて異彩を放つとともに、読者への娯楽要素の提供となっている。*Rasā'il*, vol. II, pp. 204-377; Giese(tr.).

ある。肉体は仮の宿りであり、靈魂はそこに纏う衣服であるとの説明の後、以下のような比喩表現で靈魂の肉体よりの離脱を説く。

兄弟よ、以下のことを知れ。すなわち、肉体は船、靈魂は船長、善行は商人の抱える商品、この世 (al-dunyā) は海、日々は航海、死は到着目的地、来世 (al-dār al-ākhirah) は商人の住む町、天国 (al-janna) は利益 (al-ribh)、至高の神は報償を授ける王のごとし。また同様に、商人が航海を終え、商品も無事であったとしても、船を離れて上陸しなければ、商人たちの町に入ることは許されないし、利益も消え去る。この靈魂に関する厳命 (hukm) は肉体に対しても当てはまる。⁽⁸⁶⁾

このように、種々の面から読者の利便性を考慮している点も、同胞信者向けの著作という限定はあるが、専門家ではない一般読者を対象としていることで、百科全書の資格を有する。⁽⁸⁷⁾

以上を要約すれば、『書簡集』において学知の分類・体系化と知識の網羅的な記述が一体化し、広汎な読者の教化を目的とする著作、すなわち、百科全書、がアラブ・イスラーム文化において初めて誕生したと評価できよう。⁽⁸⁸⁾そしてまた、知識の修得を介して救済を目指そうとするその著作意図からして、『書簡集』は「知は力なり」とするアラブ・イスラーム文化に通底する思想を具現化した書物と見なせるであろう。⁽⁸⁹⁾

(以下次号)

(86) *Rasā'il*, vol. III, p. 44. Cf. Widengren, p. 190.

(87) 『書簡集』の百科全書としての評価は、Heinrichs, p. 127; Gelder, p. 255; Marquet(1991), pp. 47-48; Nanji, p. 269; Widengren, pp. 181-182, p. 185, p. 189、参照。

(88) 『書簡集』は当時知られていた全知識を集成し、解説したものと考えられているが、自生的なアラブ・イスラーム学の核をなす歴史と言語に関する項目が欠けているのが注目される。Gelder, p. 257. 歴史に関しては、哲学的思考に基づき、森羅万象を解説して神の叡智を看取させ、もって人びとを覚醒させ、改心させる著作ゆえに、歴史の知識は不要とされた、と Gelder は説く。歴史に関するこの認識が『書簡集』の宗教的な著作意図が現れている。Gelder, p. 258. 他方、言語に関しては、第 31 書簡において扱われているが、音声論や意味論を中心とする純言語学的な解説に終始しており、特にアラビア語に限定した説明法を取っていない。ここにフワーリズミーとの顕著な相違が認められ、普遍的な哲学的議論を行う『書簡集』の特徴が現れている。Cf. Heinrichs, p. 128, fn. 20. 他方、『書簡集』においては、職業の意義が説かれているように、現実生活の充実をも巻添している。これらの点から非専門家である一般信者という、ターゲットとする読者層の姿が浮かび上がる。Callatay, p. 63; Marquet(1961), p. 227.

(89) 『書簡集』では繰り返し、「知識は行動の基」であると説かれ、「知識のための知識」に陥らないように注意を喚起する。*Rasā'il*, vol. 1, p. 258, p. 262, p. 274. アラブ・イスラーム世界において百科全書の知識が社会進出や栄達の有効な手段であるとの指摘は、Paret, p. 80; Gelder, p. 246; Chamberlain, p. 5、参照。また、Natiij は博識を基とするアダブが評価された社会では、会話と社交が核となっていたと論じる。Natiij, p. 227, p. 230, pp. 272-274.

【文献略称】

- EAL Encyclopedia of Arabic Literature
EI Encyclopaedia of Islam, sec. edition
ISM L'Encyclopédisme(ed. A. Becq)
PET Pre-Modern Encyclopaedic Texts(ed. P. Binkley)
事典 歴史学事典 (弘文堂)

【参考文献】

- Bakar, Osman, *Classification of Knowledge in Islam : A Study in Islamic Philosophies of Science*, sec. ed., Cambridge, The Islamic Texts Society, 1998.
- Becq, Annie(ed.), *L'Encyclopédisme : Actes du Colloque de Caen 12-16 janvier 1987*, Paris, Klincksieck, 1991.
- Bergé, Marc(ed. & tr.), “Épître sur les sciences (*Risāla fī l-‘ulūm*) d’Abū Ḥayyān at-Tawhīdī,” *Bulletin des Études Orientales*, 16(1963-1964).
- Binkley, Peter(ed.), *Pre-Modern Encyclopaedic Texts: Proceedings of the Second COMERS Congress*, Leiden, Brill, 1997.
- Blachère, Régis, “Quelques Réflexions sur les Formes de L’Encyclopédisme en Égypte et en Syrie du VIII^e/XIV^e siècle à la Fin du IX^e/XV^e siècle,” *Bulletin des Études Orientales*, 23(1970).
- Bosworth C. E., “A Pioneer Arabic Encyclopedia of the Sciences: al Khwārizmī’s *Keys of the Sciences*,” *Isis*, 54(1963).
- Boüard, Michel de, “Réflexions sur l’encyclopédisme médiéval,” in *ISM*.
- Bremond, Claude and Darbord, Bernard, “Tawaddud et Teodor: Les enjeux ludiques du savoir,” in ed. Michelangelo Picone, *L’Enciclopedia medievale*, Ravenna, 1994.
- Callatāy, Godefroid de, *Ikhwan al-Safa’ : A Brotherhood of Idealists on the Fringe of Orthodox Islam* – Makers of the Muslim World, Oxford, Oneworld, 2005.
- Chamberlain, Michael, *Knowledge and Social Practice in Medieval Damascus, 1190-1350*, Cambridge, Cambridge University Press, 1994.
- Chapoutot-Remadi, Mounira, “L’Encyclopédie arabe au X^e siècle,” in *ISM*.
- Collison, Robert, *Encyclopaedias : Their History throughout the Ages*, New York & London, Hafner, 1966.
- Corbin, Henry, *Histoire de la philosophie Islamique: Des origines jusqu’à la mort d’Averroës*, Gallimard, 1964. (黒田・柏木訳『イスラーム哲学史』、岩波書店、1970年)。
- Diwald, Susanne, *Arabische Philosophie und Wissenschaft in der Enzyklopädie: Kitāb Iḥwān aṣ-ṣafā’ (III): Die Lehre von Seele und Intellekt*, Wiesbaden, Otto Harrassowitz, 1975.
- Dodge, Bayard(tr.), *The Fihrist of al-Nadīm: A Tenth-Century Survey of Muslim Culture*, New York and London, Columbia University Press, 1970.
- al-Fārābī, *Iḥṣā’ al-‘Ulūm*, ed. and trans. A. Gonzalez Palencia, *Catálogo de las ciencias*, Madrid/Granada, Consejo Superior de Investigaciones Científicas, 1953, 2nd ed.
- Foucault, Michel, *Les mots et les choses : une archéologie des sciences humaines*, Gallimard, 1966. (渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物—人文科学の考古学』、新潮社、1974年)。
- Fowler, Robert, L., “Encyclopaedias: Definitions and Theoretical Problems,” in *PET*.

- Freimark, Peter, *Das Vorwort als literarische Form in der Arabischen Literatur: Inaugural-Dissertation zur Erlangung des Doktorgrades der Philosophischen Fakultät der Westfälischen Wilhelms-Universität zu Münster*, 1967.
- Gardet, L. and Anawati, M. M., *Introduction à la théologie Musulmane : Essai de théologie comparée*, Paris, J. Vrin, 1948.
- Gelder, Geert Jan van, "Compleat Men, Women and Books : On Medieval Arabic Encyclopaedism," in *PET*.
- Gerhardt, Mia, I., *The Art of Story-Telling: A Literary Study of The Thousand and One Nights*, Leiden E. J. Brill, 1963.
- Gerresch, Claudine, "Un récit des *Mille et Une Nuits* : Tawaddud, Petite Encyclopédie de l'Islam Médiéval," *Bulletin de L'Institut Fondamental d'Afrique Noire*, 35(1973).
- al-Ghazālī, *Maqāṣid al-Falāsifa*, ed. Aḥmad Farīd al-Mazīdī, Beirut, Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 2003. (黒田壽郎訳『哲学者の意図 — イスラーム哲学の基礎概念』イスラーム古典叢書、岩波書店、1985年)。
- Giese, Alma(tr.), *Mensch und Tier vor dem König der Dschinnen. Aus den Schriften der Lauteren Brüder von Basra*, Hamburg, Felix Meiner, 1990.
- Grunebaum, Gustave E. von, *Medieval Islam: A Study in Cultural Orientation*, sec. ed., Chicago & London, The University of Chicago Press, 1969.
- Gutas, Dimitri, *Greek Thought, Arabic Culture: The Graeco-Arabic Translation Movement in Baghdad and Early 'Abbasid Society*, London, Routledge, 1998. (山本啓二訳『ギリシア思想とアラビア文化 — 初期アッバース朝の翻訳運動』、勁草書房、2002年)。
- Heck, Paul, L., "The Hierarchy of Knowledge in Islamic Civilization," *Arabica*, 49(2002).
- Heinrichs, Wolfhart, "The Classification of the Sciences and the Consolidation of Philology in Classical Islam," in eds. J. W. Drijvers and A. A. MacDonald, *Centres of Learning: Learning and Location in Pre-Modern Europe and the Near East*, Leiden, Brill, 1995.
- Holmberg, Bo, "Adab and Arabic Literature," in ed. G. Lindberg-Wada, *Literary History: Towards a Global Perspective, vol. 1, Notions of Literature across Times and Cultures*, Berlin & New York, Walter de Gruyter, 2006.
- Ibn 'Abd Rabbih, *al-'Iqd al-Farīd*, ed. M. M. Qamīḥa, Beirut, Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1983.
- Ibn Khaldūn, *Muqaddima Ibn Khaldūn*, Beirut, Dār al-Jīl, nd. (森本公誠訳『歴史序説』、岩波書店、2002年)。
- Ibn al-Nadīm, *Kitāb al-Fihrist*, ed. Rida Tajaddud, Teheran, 1968.
- Ibn Qutayba, (*Kitāb*) *al-Ma'ārif*, ed. Tharwat 'Ukāsha, Cairo, Dār al-Ma'ārif, 1969.
- , *Adab al-Kātib*, ed. Muḥammad al-Dālī, Beirut, Mu'assasa al-Risāla, 1981.
- , *'Uyūn al-Akhbār*, ed. Yūsuf 'Alī Ṭawīl, Beirut, Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1985.
- al-Ibshīhī, *al-Mustaṭraf fī Kull Fann Mustazraf*, ed. Mufīd Muḥammad Qamīḥa, Beirut, Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1986.
- al-Khwārazmī, M. b. Aḥmad b. Yūsuf, *Mafātīḥ al-'Ulūm, (Liber māfatīḥ al-olūm)*, ed. G. van Vloten, Leiden, E. J. Brill, 1895, rpt., 1968.
- Kilpatrick, H., "Cosmic Correspondences: Songs as a Starting Point for an Encyclopaedic Portrayal of Culture," in *PET*.
- Klein-Franke, Felix, "The *Ḥamāsa* of Abū Tammām," part 1, *JAL*, 2(1971), part 2, *JAL*, 3(1972).

- Lecomte, Gérard, *Ibn Qutayba(mort en 276/889): l'homme, son œuvre, ses idées*, Damas, Institut Français de Damas, 1965.
- Macnaghten, W. H.(ed.), *The Alif Laila or Book of the Thousand Nights and One Night*, Calcutta, W. Thacker, London, Wm. H. Allen, 1839. (前嶋信次訳『アラビアン・ナイト 10』、平凡社、1979年)。
- Mahdi, Muhsin, "Science, Philosophy, and Religion in Alfarabī's *Enumeration of the Sciences*," in eds. J. E. Murdoch and E.D. Sylla, *The Cultural Context of Medieval Learning*, Dordrecht and Boston, D. Reidel, 1975.
- Marquet, Yves, "La Place du Travail dans la Hiérarchie Ismā'īlienne d'après *L'Encyclopédie des Frères de la Pureté*," *Arabica*, 8(1961).
- , "L'Encyclopédie des 'Frères de la pureté'(Ihwān aş-Şafā')," in *ISM*.
- Marzolph, Ulrich, "Medieval Knowledge in Modern Reading: A Fifteenth-Century Arabic Encyclopaedia of *omni re scibili*," in *PET*.
- McKeon, Richard, "The Organization of Sciences and the Relations of Cultures in the Twelfth and Thirteenth Centuries," in eds. J. E. Murdoch and E. D. Sylla, *The Cultural Context of Medieval Learning*, Dordrecht and Boston, D. Reidel, 1975.
- Meier, Christel, "Organization of Knowledge and Encyclopaedic *ordo* : Functions and Purposes of a Universal Literary Genre," in *PET*.
- Miquel, André, *Sept contes des Mille et Une Nuits : ou Il n'y a pas de contes innocents*, Paris, Sindbad, 1981.
- , "The Thousand and One Nights in Arabic Literature and Society," in eds. R. G. Hovannisian and G. Sabagh, *The Thousand and One Nights in Arabic Literature and Society*, Cambridge, Cambridge University Press, 1997.
- Nallino, Carlo-Alfonso, *La Littérature Arabe des Origines à L'Époque de la Dynastie Umayyade*, Paris, G. P. Maisonneuve, 1950.
- Nanji, Azim, "On the Acquisition of Knowledge: A Theory of Learning in the *Rasā'il Ikhwān Al-Şafā'*," *The Muslim World*, 66(1976).
- Nasr, Seyyed Hossein, *An Introduction to Islamic Cosmological Doctrines: Conceptions of Nature and Methods used for its Study by the Ikhwān al-Şafā', al-Bīrūnī, and Ibn Sīnā*, rev. ed., London, Thames and Hudson, 1989.
- Natij, Salah, "La nuit inaugurale de *Kitāb al-Imtā' wa-l-mu'ānasa* d'Abū Ḥayyān al-Tawhīdī: une leçon magistrale d'*adab*," *Arabica*, 55(2008).
- Netton, Richard, *Muslim Neo-Platonists: An Introduction to the Thought of the Brethren of Purity*, London, George Allen & Unwin, 1982.
- Paret, Roger, "Contribution à l'étude des milieux culturels dans le Proche-Orient médiéval : «l'encyclopédisme» arabo-musulman de 850 à 950 de l'ère chrétienne," *Revue Historique*, T. CCXXX, n° 477(1966).
- Pellat, Ch., "Variations sur le thème de l'*adab*," *Correspondance d'Orient*, Études 5-6(1964).
- , "Les Encyclopédies dans le Monde Arabe," *Cahiers de Histoire Mondiale*, 9(1966).
- Rasā'il Ikhwān al-Şafā' wa Khullān al-Wafā'*, Beirut, Dār Şādir, n.d. (菊地達也訳「イフワーン・アッサファール書簡集」、上智大学中世思想研究所編訳『中世思想原典集成 11 イスラーム哲学』平凡社、2000年)。

- Ribémón, Bernard, "On the Definition of an Encyclopaedic Genre in the Middle Ages," in *PET*.
Rosenthal, Franz, *Knowledge Triumphant: The Concept of Knowledge in Medieval Islam*, Leiden,
E. J. Brill, 1970.
- Rubincam, Catherine, "The Organization of Material in Graeco-Roman World Histories," in *PET*.
Sperl, Stefan, "Man's 'Hollow Core': Ethics and Aesthetics in *Hadīth* Literature and Classical
Arabic *adab*," *BSOAS*, 70(2007).
- Tibawi, A. L., "Some Educational Terms in *Rasā'il Ikhwān Aṣ-Ṣafā'*," *Islamic Quarterly*, 5(1959).
Vesel, Živa, *Les Encyclopédies persanes: Essai de typologie et de classification des sciences*,
(Institut Français de Recherche en Iran), Paris, Éditions recherche sur les civilisations, 1986.
- Widengren, Geo, "The Gnostic Technical Language in the *Rasā'il Iḥwān al-Ṣafā'*," in *Actas: IV
Congresso de Estudos Árabes e Islâmicos, Coimbra – Lisboa, 1 a 8 de Setembro de 1968*,
Leiden, E. J. Brill, 1971.
- 岡崎桂二「アラブ文学における論争ジャンル —『マカーマート』の周辺」『四天王寺大
学紀要』人文社会学部 43 号、2009 年。
- 同「アダブ考 — アラブ・イスラーム文化におけるアンソロジーの思想」『四天王
寺大学紀要』、印刷中。
- 勝村哲也「類書の歴史 — 雑の系譜」『月刊しにか』、9 卷 3 号 (1998 年)。
- 木下登「ドミニクス・グンディサリヌスの学問分類 — 西洋 12 世紀におけるその思想革
命の一側面」『中世の学問観』(中世研究第 9 号)、上智大学中世思想研究所編、1995 年。
- 中村廣治郎『イスラムの宗教思想 — ガザーリーとその周辺』、岩波書店、2002 年。
- 廣川洋一「<自由三学科>の成立」『新岩波講座哲学 14 哲学の原型と発展 哲学の歴
史 I』、岩波書店、1985 年。
- 三浦伸夫「アラビアの数学」、伊東俊太郎 (編)『数学の歴史 2 中世の数学』、共立出版、
1987 年。
- 水落健治「アウグスティヌスと学問 —『キリスト教の教え』を中心に」『中世の学問観』
(中世研究第 9 号)、上智大学中世思想研究所、1995 年。
- 守川知子 (監訳)「ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィー著『被造物の驚異と
万物の珍奇』(1)」、『イスラーム世界研究』、第 2 卷 2 号、2009 年。
- 渡部望『『百学連環』の歴史的位置と意義』『北東アジア研究』、第 14・15 合併号 (2008 年)。